

マンデラとイーストウッド—『インビクタス / 負けざる者たち』

*If you want to make peace with your enemy, you have to work with your enemy.
Then he becomes your partner.* — by Nelson Mandela



帝京科学大学教授 塩川 春彦

過日、クリント・イーストウッド監督の最新作『インビクタス / 負けざる者たち』(2009年)を観た。前年に同監督の『グラン・トリノ』(2008年)を観て感銘を受けていたので、『インビクタス』には期待をしていたのだが、果たして素晴らしい映画だった。70歳を過ぎて、なお旺盛な創作活動を続けるイーストウッドには驚嘆させられる。

舞台は1990年代初頭の南アフリカ共和国。悪名高きアパルトヘイト^(注)が撤廃され、黒人のマンデラ大統領が誕生したが、黒人たちの生活が急激に豊かになるわけもなく、白人たちは長年にわたって抑圧した黒人からの復讐を恐れていた。そのような事態にマンデラは、人種間の和解と融和を呼び掛け、経済格差の是正などを目指した。マンデラは、白人たちが大切にしてきた文化であるラグビーを尊重することで、対立から和解に導こうとした。その過程を描いたのが『インビクタス』である。劇的な結末はもちろん、周辺のエピソードまでよく出来ているので脚色と思われがちだが、多くは実話のようだ。試合場面は、エンターテインメントとして成功している。モーガン・フリーマンとマット・デイモンの演技が光っていることは、多くの批評で言及されているとおりである。

アパルトヘイト時代の黒人への苛烈な抑圧や残虐な仕打ち、政治犯として27年も牢獄生活を強いられたマンデラの苦難、あるいはマンデラ政権誕生後にラグビーチームが急速に強くなっていく過程など、観客が興味を惹かれるに違いない要素のほとんどをイーストウッドは描かず、黒人と白人の関係を象徴的に描写していく。砂まみれになりながら裸足でサッカーに興じる黒人たちと、揃いのユニフォームを着てラグビーで汗を流す白人たち。マンデラ大統領付きの白人護衛と黒人護衛の微妙な関係。保守的な白人家庭と、そこで家政婦として働く黒人女性。黒人の少年たちにラグビーを教えにいく白人プレイヤーたち。車窓から見える黒人スラム街。マンデラがかつて入れられていた狭い牢獄を見学する白人プレイヤーたち、などなど。ちなみに、アパルトヘイト時代の黒人の苦闘をもっと詳しく知りたい若い人びとには、『遠い夜明け』(リチャー

ド・アッテンボロー監督、1987年)を観ることを勧めたい。これはただ単に深刻なだけでなく、観ている者を飽きさせないエンターテインメント性も持った優れた作品である。

モーガン・フリーマン演じるマンデラは、かつて自分を27年間も牢獄に閉じ込めた白人を敵対視せず、友好的に接することこそが最善の道だと信じている。このことは、『マンデラの名もなき看守』(ビレ・アウグスト監督、2007年)を観た者には、自然に受け入れられるだろう。『マンデラの名もなき看守』は、マンデラの3回目の刑務所生活と、彼との出会いを通して社会を見つめ直す白人看守グレゴリーとの交流が描かれる、実話をもとにした作品である。

イーストウッドは長い映画人生の中でさまざまな役を演じ、さまざまな作品を作ってきた。マカロニウェスタン時代は欲望や生存のために人を殺す役を演じ、『ダーティ・ハリー』シリーズでは悪者を「力」でねじ伏せる役を演じた。「正義のための暴力」を無邪気に肯定できない私は、これらの時代のイーストウッドの出演作品は好きになれない。評価が高く、アカデミー賞も獲得した監督・主演作『許されざる者』(1992年)では、薄幸な女性たちへのやさしい眼差しはあったが、「悪を力で抹殺する」思想の肯定ぶりには相当な違和感を覚えた。一方、『グラン・トリノ』、『インビクタス』では、悪や憎しみの連鎖は止まるのか、人種偏見・人種差別は終わりを告げるのか、というテーマを問うている。母国を追われ米国に移り住んだ少数民族の人々を描いた『グラン・トリノ』では、米国社会に溶け込めずギャング集団になっていく移民の若者たちへの対峙のしかたは、『ダーティ・ハリー』とは全く異なっていた。「復讐」を演じ描き続けてきたイーストウッドであるが、『グラン・トリノ』では「自己犠牲」、『インビクタス』では「和解と赦し」の物語を描いたのである。

(注) 南アフリカ共和国で1948年から1990年初頭まで続いた人種隔離政策。